

郷中だより

令和3年2月12日
倉敷市立郷内中学校長発行
学校だより 第22号

PTA 人権教育講演会

昨年度に引き続き、岡山県発達障害当事者会「どろだんご」の会 代表 瑠璃 真衣子 様とお母様の犬飼 幹子 様にお越しいただきました。「ありのままを受け入れて生き抜く ～ 発達障害とともに ～ 」という演題で、今回は主にお母様の立場からお話をしてくださいました。



ご家族も学校の先生も誰も真衣子さんの障害に気づかなかった幼少期、思春期に、「お母さんが一番きらい。お母さんの弁当が一番きらい。」「この家には、おれん。」「お母さんが友達をなくしていく。」などと言われる理由がまったくわからず、母も娘もしんどかった頃の話、当時の母親の気持ち、娘の気持ちを振り返りながらユーモアたっぷりに話してくださいました。例えば、「お母さんの弁当が一番きらい」は、母としては、朝早く起きて、栄養バランスも考え、ご飯とおかずを彩りよく詰めたのですが、娘は、弁当箱にいろいろなものが混ざっていると気持ち悪くて食べられなかったことから発した言葉でした。また、テストで100点をとると、「100点とってすごい。」と結果だけを認められ、努力した過程をほめてくれなかったので、「次も100点を取らなきゃいけない」とプレッシャーだったそうです。

真衣子さんが就職されてからも命の危険を伴う出来事や職場でもいろいろなことがあり、今から11年前の24歳頃に発達障害の診断を受け、親子で「目にみえない障害があること」を実感され、ありのままの自分を受け入れると同時に、ありのままに生きていく娘を応援できるようになったそうです。

お二人の体験は想像以上に壮絶でしたが、お母様の言葉の端々に、真正面から苦痛をぶつけてくる娘をしっかりと受け止め、娘の苦しさを一生懸命に理解しようとする親の覚悟と愛情を感じました。御存知のように、郷内には発達障害の理解を深めるために勉強会をされ、子どもたちの理解者を増やし笑顔いっぱいの地域にしていく活動をされている「たんぽぽ団」という地域の会があります。また、講演を聴いた生徒たちの素直で前向きな感想を読んで、ますます郷内が笑顔いっぱいになることを確信しました。

【生徒の感想から】

- 外見だけでは障害があることがわからない人がいることを初めて知りました。障害があってもなくてもみんな誰かに支えられて生活していることを改めて実感しました。
- ヘルプマークをつけている人を見たら、何かお手伝いしたいと思いました。私は、障害はないけど、テストで高い点をとったという「結果」だけでほめられるとプレッシャーになるというところがとても共感できました。
- お話を聴いて、相手が必要としていることをすることが大切だということを学びました。誰かが困っている時、この人は何をしてほしいのかを理解しようと考えることが大事だと思いました。
- 僕はあまり発達障害のことを知らずに生きてきました。もしクラスに発達障害の人がいたら、たぶんいじめていたと思います。だけど、話を聴いて気持ちが変わり、もっと発達障害の人たちを助けに行きたい！！と思いました。
- 私も発達障害をもっています。「パニックになった時は、そっとそばにいてほしい」という話は私も同じだなと思いました。プリントの整理整頓が苦手なところも何のプリントかわからないものはとりあえず机の中にしまいこむところもそっくりだと思います。貴重な話を聴かせてくださりありがとうございました。
- 自分にもおなじような経験がたくさんあったのでよくわかりました。母にもこの話を聴いてほしかったです。

裏面に続く→

- 私は家族の中で同性がお母さんしかいなくて共感してほしいなと少し期待しながら相談するけど、結局、共感どころか私が悪いと叱られるばかりで、最近はお母さんに相談事をするとはなくなりました。瑠璃先生も犬飼先生もそれぞれちがう辛さを味わっていて、相手にわかってもらえなくて悔しい気持ちはすごく共感しました。
- ぼくは話を聴いて、発達障害の人はいろいろなことができないと思っていたけど、できるのが遅いだけだということにすごく興味をもちました。
- 親と子の思っていることがすれ違うことは障害があるなしに関わらずあることだから、その時自分が何をしてほしいのかはできるだけ伝えたほうがいいと思いました。それに親は子どもに楽しく暮らしてほしいと思って接していても、子どもはそれが嫌だったりするから、相手のことを考えて動くのは大切なことだけど難しいことだなと思いました。あと、他人に言われるより、自分で決めた方が実行できるっていうのはすごく共感しました。だから私は自分で考えて行動できるようになりたいと思いました。
- 私の家族や親せきに障害をもっている人はいないから助けることをしなくていいじゃなくて、電車やお店の中で困っている人がいたら、積極的に助けようと思います。
- お話を聴いて思ったことは、障害があってもなくても命はみんな平等に大切ということです。
- 私も母とけんかをしたり、母に気持ちがわかってもらえなかったことはあります。でも犬飼先生が話しておられたように、私の母も私のことを大切に思って心配してくれていたんだろうなということがわかりうれしかったです。

【保護者の方から】 講演会に参加された保護者の方がお手紙をくださいました。ご紹介します。

発達障害の子をもつ親として、子どもとどう向き合い、どう接していけばよいのか、正直、本当にわからないというのが現実で、でも毎日の生活はしていかないといけないという中で、このような講演会があり、とてもありがたかったです。当事者である子どもの気持ちとしては、そばにいて見守るだけでよいのだ、そうしてほしいと思っていたんだ・・・ということがわかりました。また、「サーモンいくら丼事件」のエピソードでは、サーモンいくら丼が頼まれた店になく、本人が頼んでいない店へわざわざ行き、同じようなものを買ってきた母親の気持ちはよくわかります。しかし、娘は本人が思ってもいないものを買ってきた母親に、母が買って来たものを投げつけた・・・。私もやってしまいそうなので、不要なことはしない方がよいのだと反省しました。 (中略)

私から中学生の皆さんに理解してほしいことがあります。障害者手帳を持っている者の一人として伝えたいこと、それは、瑠璃先生もおっしゃっていましたが、見た目ではわからない内部障害、心の病などいろいろな障害や病気をもっておられる人がたくさんいます。なりたくてなっているわけではないし、障害があってもなくても、得意なことや好きなこともあるし、苦手なこともあります。クラスの中にもいろんな人がいて、みんな頑張っているからクラスが楽しくなるのだと思うのです。発達障害や病気があることは恥ずかしいことではありません。みんなが自分の発達障害のことを知ってくれている方が安心する人もいますのです。皆さんは本当に困った時に相談できる相手がありますか？心が「大丈夫ではない、無理！」と思ったときは一人で悩まずにきちんとだれかに相談してください。そして、助けてもらったら「ありがとう」と感謝することを忘れず、自分がまちがったことをした時は、「ごめんなさい」と言える人になってください。

保護者の皆様へ

1, 2年生の参観授業では、子どもたちががんばっている姿をたくさんの保護者の方にご覧いただくことが何よりうれしいです。また、教室が密にならないように、自主的に交代で参観して下さっていた姿にも感動しました。たくさんの場面でのご配慮やご協力に感謝の気持ちでいっぱいです。

3年生の入試の引率では、到着や帰宅などのご連絡をありがとうございました。卒業まで1か月になりました。1月2月は私立や公立の入試が続き、子どもも親も精神的に疲れることが多いですが、子どもたちが笑顔で晴れやかに巣立っていけるように学校も頑張りますので、お互いに健康に留意し、適度に気分転換をしながら乗り越えましょう。

